

1. あなたが、はいつて行って、所有しようとしている地に、あなたの神、主が、あなたを導き入れられるとき、主は、多くの異邦の民、すなわちヘテ人、ギルガシ人、エモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、およびエブス人の、これらあなたよりも数多く、また強い七つの異邦の民を、あなたの前から追い払われる。
2. あなたの神、主は、彼らをあなたに渡し、あなたがこれを打つ時、あなたは彼らを聖絶しなければならない。彼らと何の契約も結んではならない。容赦してはならない。
3. また、彼らと互いに縁を結んではならない。あなたの娘を彼の息子に与えてはならない。彼の娘をあなたの息子にめとってはならない。
4. 彼はあなたの息子を私から引き離すであろう。彼らがほかの神々に仕えるなら、主の怒りがあなたがたに向かって燃え上がり、主はあなたをたちどころに根絶やしにしてしまわれる。
5. むしろ彼らに対して、このようにしなければならぬ。彼らの祭壇を打ちこわし、石の柱を打ち砕き、彼らのアシェラ像を切り倒し、彼らの彫像を火で焼かなければならぬ。
6. あなたは、あなたの神、主の聖なる民だからである。あなたの神、主は、地の面のすべての国々の民のうちから、あなたを選んでご自分の宝の民とされた。
7. 主があなたがたを恋慕って、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実、あなたがたは、すべての国々の民のうちで最も数が少なかった。
8. しかし、主があなたがたを愛されたから、また、あなたがたの先祖たちに誓われた誓いを守られたから、主は、力強い御手をもってあなたがたを連れ出し、奴隷の家から、エジプトの王パロの手からあなたを贖い出された。
9. あなたは知っているのだ。あなたの神、主だけが神であり、誠実な神である。主を愛し、主の命令を守る者には恵みの契約を千代までも守られるが、
10. 主を憎む者には、これに報いて、主はたちどころに彼らを滅ぼされる。主を憎む者には猶予はされない。たちどころに報いられる。
11. 私が、きょう、あなたに命じる命令——おきてと定め——を守り行なわなければならない。
12. それゆえ、もしあなたがたが、これらの定めを聞いて、これを守り行なうならば、あなたの神、主は、あなたの先祖たちに誓われた恵みの契約をあなたのために守り、
13. あなたを愛し、あなたを祝福し、あなたをふやし、主があなたに与えるとあなたの先祖たちに誓われた地で、主はあなたの身から生まれる者、地の産物、穀物、新しいぶどう酒、油、またあなたの群れのうちの子牛、群れのうちの雌羊をも祝福される。
14. あなたはすべての国々の民の中で、最も祝福された者となる。あなたのうちには、子のない男、子のない女はいないであろう。あなたの家畜も同様である。
15. 主は、すべての病気をあなたから取り除き、あなたの知っているあのエジプトの悪疫は、これを一つもあなたにもたらさず、あなたを憎むすべての者にこれを下す。
16. あなたは、あなたの神、主があなたに与えるすべての国々の民を滅ぼし尽くす。彼らをあわれんではならない。また、彼らの神々に仕えてはならない。それがあなたへのわなとなるからだ。
17. あなたが心のうちで、「これらの異邦の民は私よりも多い。どうして彼らを追い払うことができよう。」とすることがあれば、
18. 彼らを恐れてはならない。あなたの神、主がパロに、また全エジプトにされたことをよく覚えていなければならない。
19. あなたが自分の目で見たあの大きな試みと、しるしと、不思議と、力強い御手と、伸べられた腕、これをも

って、あなたの神、主は、あなたを連れ出された。あなたの恐れているすべての国々の民に対しても、あなたの神、主が同じようにされる。

20. あなたの神、主はまた、くまばちを彼らのうちに送り、生き残っている者たちや隠れている者たちを、あなたの前から滅ぼされる。
21. 彼らの前でおののいてはならない。あなたの神、主、大いなる恐るべき神が、あなたのうちにおられるから。
22. あなたの神、主は、これらの国々を徐々にあなたの前から追い払われる。あなたは彼らをすぐに絶ち滅ぼすことはできない。野の獣が増してあなたを襲うことがないためである。
23. あなたの神、主が、彼らをあなたに渡し、彼らを大いにかき乱し、ついに、彼らを根絶やしにされる。
24. また彼らの王たちをあなたの手へ渡される。あなたは彼らの名を天の下から消し去ろう。だれひとりとして、あなたの前に立ちはだかる者はなく、ついに、あなたは彼らを根絶やしにする。
25. あなたがたは彼らの神々の彫像を火で焼かなければならない。それにかぶせた銀や金を欲しがってはならない。自分のものとしてはならない。あなたがわなにかけられないために。それは、あなたの神、主の忌みきらわれるものである。
26. 忌みきらうべきものを、あなたの家に持ち込んで、あなたもそれと同じように聖絶のものとなってはならない。それをあくまで忌むべきものとし、あくまで忌みきらわなければならない。それは聖絶のものだからである。

説教

申命記7章は、約束の地カナンに入った後どのようにあるべきかについて、モーセが教える場面です。

イスラエルの民がこれから入って行くカナンには、「ヘテ人、ギルガシ人、エモリ人…」といった「多くの異邦の民」が既に住んでいます。しかも、彼らはイスラエルよりも「数多く、また強い」のでした。それでイスラエルは、こうした強敵の「七つの異邦の民」を「追い払い」、あるいは「聖絶」しながら、カナンを征服し、そこに定住することになります。その際、ここでモーセがイスラエルの民に命じることは、これらカナンの先住民たちと仲良く共存しようとか、良い関係を構築しようなどと考えるとはならないということです。

「彼らと何の契約も結んではならない。容赦してはならない。また、彼らと互いに縁を結んではならない。あなたの娘を彼の息子に与えてはならない。彼の娘をあなたの息子にめとってはならない。」(7:2-3) これは結婚についての教えです。イスラエルがカナンに入ってそこで生活していく際、美しい先住民の娘に心惹かれて結婚したくなるということも当然あり得ることです。あるいは、イスラエルの同族には嫁が足りないために、先住民の娘をめとる必要も出てくるかも知れません。でも、モーセは「彼らと互いに縁を結んではならない」と厳しく異教徒との結婚を禁じます。

それは次の理由によります。「彼はあなたの息子を私から引き離すであろう。」(4) つまり、異教徒であるカナン人と結婚することで、異教の宗教もまた家に持ち込まれ、イスラエルが彼らの偶像と一緒にあってはならないこと、あなたがたにはわたしの他に他の神々があってはならない」という十戒の第一戒に背いて、偶像崇拜の罪を犯すことになるということです。そして、そうなれば、「主の怒りがあなたがたに向かって燃え上がり、主はあなたがたをたちどころに根絶やしにしてしまわれ」ます(4)。せっかく約束の地カナンに入ることができたのに、そこで異教徒と同様に滅ぼされてしまうというのでした。

「朱に交われば赤くなる」と言いますが、「神の民」が「世の民」と交わると「世の民」へと墮落してしまうということです。ミイラ取りがミイラになります。残念なことですが、神を信じるクリスチャンがわざわざ不信者と結婚することはよくあることです。ある人は、不信者に伝道するために不信者と結婚するなど理由付けして結婚するのですが、その結果、神を試みて、余計な苦勞を背負うことになるでしょう。聖書が教えるのは、キリスト者が不信者と結婚すれば、不信者がキリスト者の良い影響を受けてキリ

スト者となるということではなくて、その逆です。すなわち、キリスト者の方が、不信者である配偶者の悪しき影響を受けて、不信者同様に偶像崇拜をするようになるということです。残念ですが、これが現実です。

つまり、人間はそれほど弱い存在なのです。そして、悪の力はあまりに巨大です。考えてみれば、弱く罪深い人間が、自分の力で相手を感化して、不信者をキリスト者にしてあげようなどと思っていること自体、とんでもない傲慢です。人間は、弱く、罪深いのですから、悪に勝てると自信ありげに悪の渦中に身を投じて生活するのではなく、むしろ、異教社会から距離を置きながら、生活をしなければなりません。異教徒とは「縁を結ばず」、「彼らの祭壇を打ち壊し、石の柱を打ち砕き、彼らのアシェラ像を切り倒し、彼らの彫像を火で焼かなければならない」のです(5)。つまり、自分の周りにある偶像崇拜の誘惑をことごとく取り除かなければならないとモーセは教えます。日本風に言うと、神棚を廃棄し、仏壇を火で焼け、という具合になるでしょうか。

どうしてそこまですなければならぬのでしょうか。「あなたは、あなたの神、主の聖なる民だからである。あなたの神、主は、地の面のすべての国々の民のうちから、あなたを選んでご自分の宝の民とされた。」(6)

「聖なる」という言葉は「分離された」という意味です。イスラエルは、神に選ばれてこの世から取り分けられた、神の「聖なる民」なのです。特別な選民です。つまり、この世にあって生活してはいるものの、この世の人ではありません。敢えて言えば、天国の人です。この世の人ではなく、天国の人です。神の民なのです。ですから、世の人と同じように罪に耽った生活をして、世と共に滅び失せるのではなく、こんなことをしていたら神のさばきを受けて滅びると宣教しなければなりません。そのために、この世に、いわば、遣わされているのです。

それで、モーセは「あなたを選んでご自分の宝の民とされた」と言います。イスラエルは神の「宝の民」なのです。言うまでもありませんが、ダイヤにせよ、金にせよ、「宝」はこの世で最も高価な物です。世界で最も価値ある高価な「宝」、それが神の民イスラエル、キリスト者だ、と言うのです。大祭司は、この高価な「宝石」を胸当てにはめ込んで、イスラエルの民に神の栄光をあらわしました。同様に、この地上の人々に天上の神の栄光をあらわす使命を帯びてこの世に遣わされている、それが神の民イスラエルです。彼らは神の「宝石」なのです。何が神に喜ばれ、何が神に忌み嫌われることかを人々に教えて神の栄光をあらわす、それが彼らの使命です。

それでは、どうしてこれほどすばらしい神の「宝」に、彼らは選ばれたのでしょうか。何か特別にすばらしい才能に恵まれていたからでしょうか。世界に神の栄光をあらわすのに適した特性を備えていたからでしょうか。そうではありません。世界に感化を与えるためなら、彼らより数の多い民族はいくらでもありました。彼らより文明の進んだ国もいくらかありました。近代的な都市もありました。神が彼らを選ばれたのは、彼らの数が多かったからではありません。むしろ、彼らは「すべての国々の民のうちで最も数が少なかった」のです(7)。彼らは、ヘブル人と呼ばれる、さすらいの「流浪の民」でした。にもかかわらず、この広い世界から彼らが特別に選ばれたのは、「主があなたがたを愛されたから」です(8)。つまり、人の側には何一つ神に愛される理由は無かったのです。にもかかわらず、神は愛に富み、弱く罪深いイスラエルを愛されました。それこそがイスラエルが神に選ばれたただ一つの理由です。

それは神の「愛」です。この「愛」の故に、神は「奴隷の家から、エジプトの王パロの手から」イスラエルを「贖い出され」ました。「贖い出す」という言葉は「身代金を払って奴隷を釈放する」ことを意味します。尊い代価、高い高価な身代金を支払って、神はイスラエルをエジプトから救い出しました。旧約の時代には、動物のいけにえをもってこの「贖い」の代価を表現しましたが、人類を救う生けるまことの小羊はイエス・キリストです。キリストをいけにえにして、イスラエルはこの世から取り分けられ、「聖なる神の民」となります。極めて尊い犠牲ですが、彼らはそれほど神に愛され、大切にされていました。文字通り、彼らは「神の宝」「神の宝石」なのです。

それゆえ、神の愛を証しし、神のみこころを証しして、神の栄光をあらわさなければなりません。この世にありながら、この世の罪に溺れてはなりません。彼らと縁を結んではなりません。彼らの罪に巻き込まれてはなりません。そうでないと、彼らと同様、神の怒りを受けて、たちどころに滅ぼされてしまいます。なぜなら、神は「誠実な神」だからです。「誠実(ヘト)」は「変わることはない忠実さ・誠実さ」を

意味します。神の愛は「誠実」なのです。いつまでも変わることがありません。つまり、浮気しないのです。人の愛は、状況により、あるいは気分によってコロコロ変わります。でも、神の愛は変わることがありません。神の愛は「誠実」です。一途です。「先祖たちに誓われた誓いを守り」ます。一度先祖に誓った誓いは忠実に守ります。代替わりしても、時代が変わっても、変わることなく、忠実に、イスラエルを愛されるのです。

だからこそ、神は、人に対しても誠実であることを要求なさいます。二心抱かず、ひたすら誠実に人を愛しておられるので、人が浮気することをお許しにならないのです。「主を愛し、主の命令を守る者には恵みの契約を千代までも守られるが、主を憎む者には、これに報いて、主はたちどころに彼らを滅ぼされる」のです (9-10)。

私たちは弱い者です。私たちは罪深い者です。でも、神はこの弱く罪深い者を愛して、尊い代価を払って罪と滅びから救い出してくださいました。そして、神の宝の民としてくださいました。この神の愛はとこしえに変わることがありません。神の愛は誠実です。この尊い誠実な神の愛に答えて、神と人を誠実に愛して生きたいと願います。